

占領と朝鮮戦争に翻弄された地方都市

—北海道千歳町—

大谷 敏 三

千歳市総務部主幹

(市史編さん担当)

Key Word 終戦 占領 進駐軍 教育 売春婦

特殊貸間業認証に関する特別措置条例

一・終戦と戦後処理

(一) 占領

昭和二十年八月十四日、日本はポツダム宣言を受諾した。

八月二十八日に連合国軍米陸軍第八軍(以後米第八軍と略す)先遣隊が湘南海岸に上陸、以降厚木、横須賀などに続々と進駐を開始する。東日本の占領を担当した米第八軍は九月までに担当地区へ進駐を終了する(北海道は十月)。

西日本の占領にあたった米第六軍は九月二十二日から二十五日にかけて佐世保、長崎、和歌山、名古屋に第一陣を上陸させ、おおむね十一月月上旬までに各地への分散・展開を終えた。四十三万人の連合国軍が全都道府県に進駐したのである(註・一)。

アメリカの対日占領政策の基本枠組みは昭和二十年九月に公表された「降伏後における米軍の初期対日方針」と、十一月に統合参謀本部からマッカーサーに指令された「日本占領及び管理のための連合国最高司令官に対する初期の基本指令」に示されている。

「初期対日方針」では、海外領土の剥奪^{はくだ}、武装解除、軍国主義の掃蕩、民主化、平和的国際社会への日本の復帰、軍政下での日本の行政機関の利用、産業の非軍事化、労働・工業・農業分野における民主的組織の助長、日本の経済制度の所有・管理・支配のより広範な分配などを規定していた。ポツダム宣言に日本の間接占領方式が明示され、最高司令官が天皇および日本政府をつうじて権限を行使するとの規定が明示された(註・二)。こうして日本はポツダム宣言の受諾によって戦後のあり方を決めたのである。

ポツダム宣言の第十項には「日本国民のうちに民主的傾向が復活・強化される」とあり、この「復活」の一語は戦前の日本において自前の民主主義を築いていたことの認知を意味していた。

戦後アメリカの対日対策は、軍事主義的日本人を処罰し、将来日本で軍国主義が再現するのを阻止するためには、日本の政治経済、社会の改革が必要であるとするものであった。

二十一年にアメリカが発表した「日本の武装解除と非軍事化に関する四国条約案」は、米英中ソの四国が、二十五年間にわたって日本の武装解除と非軍事化の措置をとるという厳しいものであった。しかし、連合国の間では、対日講和に関する意見が一致しなかった。

(二) 終戦時の千歳

千歳海軍航空基地は無傷で八月十五日を迎えた。皮肉にもこの日、四発大攻「連山」のために建設された第二基地の滑走路「一五〇〇×八十」が完成を見ている。そして千歳にも慌しく占領軍が訪れる。八月十五日の翌日、第二基地連山滑走路に南太平洋方面から飛来したB・29重爆撃機が着陸する。北海道でB・29が離着陸できる飛行場は「連山」用に造成された千歳第二基地連山滑走路よりなかったのである。以後道内におけるB・29

用飛行場として使われた。

敗戦時、駐独陸軍武官だった大谷修が米国ベットフォードスプリングに軟禁されていたときの日記、九月二日の項に「B・二十九、三機北海道よりシカゴ迄六千マイルを一気に飛ぶ二十六時間」とある。日本時間で九月三日のことで、この連山滑走路から飛び立ったB・29は米本土シカゴまで無着陸で飛行した。この飛行は当時の無着陸の世界記録であった(註・三)。

九月九日に、千歳第二基地連山滑走路に神奈川県厚木基地から米陸軍第五航空軍(以後、米第五航空軍と略す)の高級将校二十名がB・29、二機で飛来し、海軍施設と飛行場施設を占領財産に指定した。北海道庁の早坂冬男内政部長が接触した。第一航空基地の滑走路の延長を指示した。

高級将校とは日本各地にじゅうたん爆撃をした第五航空軍の司令官のカーチス・ルメー少将とその幕僚達であった。

九月十日には、米第八軍サッター少佐ら十数人の米兵を乗せた米中型輸送機が飛来した。日本陸軍第五方面軍民間防衛涉外担当参謀福井正勝少佐(後に陸上自衛隊第七師団副師団長。退官後千歳日の出丘に在住)が接触した。

道内には美唄、赤平などの炭鉱や室蘭の港湾などに四百七十人位の連合軍米軍捕虜が抑留されていた。九月十二日、七十人の白人捕虜が飛行機で、あと四百人は汽車あるいは船で小樽から引き揚げた。

九月二十三日、米鉄道輸送部隊司令官ベッソン代将、千歳に飛来。飛来の目的は北都札幌から総司令部のある東京までを結ぶ進駐軍専用列車の運行と米軍進駐に伴う主要駅における列車運行取扱事務所(RTO)の開設にあった。十月四日には札幌駅にRTOが開設され、千歳も同時期に開設された。

(三) 連合軍北海道に進駐

極東米陸軍の主力は第八軍であった。第八軍司令官ウォルトン・H・ウォーカー中将は司令部を横浜に置いて、東北・北海道の第七十七師団、関東の第一騎兵師団、関西の第二十五師団、九州の第二十四師団の四個師団を直接指揮していた。

四個師団からなる第八軍は、五年の間、日本占領の任務についていたが、『米公刊史』によれば、充足率は七十割で、将校や下士官のなかには第二次世界大戦の歴戦者もいたが、兵の多くはうら若い十九〜二十歳の青年だった。当時の各師団は、占領軍であるということや、演習場が少なかった関係もあって、あまり訓練がされていなかった。

十月四日、米第八軍第九軍団第七十七師団の一部が函館に上陸したのに続き五日には小樽港から北海道占領主力部隊の上陸が始まった。一万六千人の人員と千台の車両が上陸し、上陸部隊は軍用トラック、装甲車両、そして列車で札幌に到着した。

第七十七師団は、「自由の女神」の隊章をつけ、フィリピンからグアム島、沖縄の激戦を経てきた。第九軍団司令官はライダー少将、第七十七師団長はグルース少将、副師団長はランドル代将であった。

一行の中心と思われる部隊が北海道拓殖銀行本店新館の入口に停ったのは午前十一時頃であった。第七十七師団長グルース少将の一行である。やや遅れてライダー少将らが札幌通信局へ入った。いずれも進駐軍用に接取され、受入れの準備は整っていた。大同生命ビル、グランドホテルなど水洗便所が設備されていた建物がつぎつぎに接取されていった。

一行の一部は小樽港に着くと、その足で千歳に入ってきた。進駐軍は、ジープ、大型トラックを連ね砂煙を上げながら、海軍航空基地千歳基地に入った。司令部は現在の航空自衛隊第二航空団200ビル内に設けられた(註・四)。

進駐当初の紳士ぶりが印象に残る。子供たちの目に映るGIたちは「親切で清潔・不思議なものを持つてい」た。

北海道進駐は東京、横浜のような事故はなく明朗におこなわれた。「なぜか？」一人の記者が訊ねた。彼らは答えた。「七十七師は歴戦の部隊だからさ。戦争の残虐さを経験してくると、われわれキリスト教民族はかえってヒューマニズムにみがかれるのだ。それに北海道は戦禍も少なく気持ちがなごむかも知れない」。またある米兵は「しかしね、実戦をやつたことのない部隊がくると、こうはいかぬかも知れない」。そしてこの言葉はあとで裏書きされた(奥田一九六一)。

進駐二週間後、早くも古参兵から本国へ復員し始め、本隊は二十一年二月に本国に帰還した。

(四) 千歳進駐

十月七日には、米第五航空軍のミリン大佐が千歳基地を接收しノースアメリカンP・51D型ムスタングを装備した戦闘機部隊が駐屯、千人が駐留した(高橋一九八二)。米兵は、地元の心配とは裏腹に非常に紳士的で何の不安も街に与えなかった。「キャンプに務めている町の娘との自由な交際」や「ヨコハマや佐世保から転勤を命じられた士官や下士官が、なじみの女をチトセの町につれてくる」ことはあったが「はじめはそれほど目にあまる状態ではなかった」(註・五)。

昭和二十一年四月には、第十一空挺師団七千人が進駐すると、人口は流入者によって増えていった。空挺部隊はノースカロライナ出身兵を主力とする落下傘部隊であり、師団長のスィング少将は実戦の経歴があったが、部隊は訓練中の兵が多かった。

進駐軍は二十一年春から真駒内の道立種畜場にキャンプ・クロフォード

の建設を始めた。この計画には千歳基地も含まれていた。真駒内一千歳間には米軍のシャトルバスが運行された。キャンプ・クロフォードには、兵二十名、下士官四名が入る一棟六十七坪の兵舎が三百三十棟を始め、食堂、将校家族の住宅、学校、グラウンド、PX、娯楽施設などが建設された。いずれも水洗便所付、スチーム暖房、給湯施設が完備されていた。

キャンプ・クロフォードは、昭和二十二年秋に完成する。兵舎、その他建坪六万坪、工費三十億を要し、米軍施設としては日本一だった。三十三年に返還されるまで北海道に駐留する米軍の中枢を担った。

千歳の空挺部隊は、昭和二十四年四月満三年で米本土へ撤退し、それに代わって米陸軍第七歩兵師団七千人が進駐した。第七歩兵師団は、朝鮮戦争の勃発により出動、留守部隊が残った。

(五) GHQの戦後改革と冷戦

昭和二十一〜二十二年は改革の季節であった。

民主主義の妨げになっていた政治的、社会的、経済的基盤再編成が行われ、天皇制、財閥、地主制から宗教、教育にいたる一連の民主化政策が非軍事化と不可分なものとして遂行された。

イギリスなどの連合国にとってアジアことに東南アジアにおける戦争は何よりも植民地奪還の戦争であった。日本の敗戦によりアジアは革命と独立の波におおわれた。国民党軍と、共産党軍との内戦が急速に決着し、二十四年十月毛沢東は北京で中華人民共和国の成立を宣言した。

戦後、新たな国際機関として国際連合が設立され、これにはアメリカも加盟した。まもなく、アメリカと戦争中は同盟関係にあったソ連との間に緊張感が生じた。ソ連の指導者ジョセフ・スターリンは、ヨーロッパで解放されたすべての国における自由選挙を約束していたにもかかわらず、ソ連は東欧に対し共産主義の独裁体制を押し付けた。

二十二年三月、モスクワでの米英仏ソ四大国外相会議以来決定的になった米ソ間の東西冷戦が、ヨーロッパを中心舞台の一つとした。

アメリカの対外政策が、対ソ強硬策に大きく転換する。三月にはトルーマン大統領が、「トルーマン・ドクトリン」、六月にはヨーロッパの復興を援国する「マーシャル・プラン」を発表し、大戦中の連合国の協調に亀裂が生じ、「封じ込め」の冷戦政策が始まる。マーシャルプランは、ヨーロッパにおけるアメリカの影響力を強化する結果になった。援助は途中から軍事的傾向を帯び、その後のNATO(北大西洋条約機構)成立への準備ともなった。

アメリカの対日政策は再検討がなされ、日本を反共戦略に結び付け冷戦の状況なかでソ連に対抗するための協力国として位置づけ、日本の経済的安定が国内からの共産化を防ぐという観点に立つものであった。

首相に返り咲いた吉田茂は「改革」を押し戻そうとする。

中国革命の直接的刺激をうけたのは、朝鮮の共産主義者であった。朝鮮は日本の敗北後、米ソにより分割占領され、昭和二十三年に南には反共の大韓民国が、北には朝鮮民主主義共和国が成立した。朝鮮半島は分断された。この二つの国家はそれぞれ自ら全朝鮮を領土とする唯一の正統国家と任じ、他方を傀儡政権と決めつけた。民族的課題である統一国家の実現は「領土完整」の課題とされ、武力統一しかないとの意識が南北双方に生まれていった。

ヨーロッパでは、ドイツは分裂国家となり、西側を英・仏・米が共同で、東側をソ連が占領した。二十三〜二十四年、ベルリン封鎖、東西領ドイツの分裂国家の誕生など東西陣営のイデオロギー的対立はヨーロッパ諸国に大きな影響を与えた。昭和二十三年春、ソ連は西ベルリンを封鎖し、町を孤立させ飢えさせることにより降伏させようとした。これにたいし西側勢力は、食料と燃料を大量に空輸し、結局、二十四年五月にソ連が閉鎖を

解いた。これより一ヶ月前、米国はベルギー、カナダ、デンマーク、フランス、アイスランド、イタリア、ルクセンブルク、オランダ、ノルウェー、ポルトガルならびにイギリスと同盟を結び、北大西洋条約機構(NATO)を結成した(和田一九八八)。

二. 朝鮮戦争と千歳

(一) 北朝鮮軍南進

昭和二十五年六月二十五日、ソ連製の武器で武装した北朝鮮軍が、スターリンの承認を得て三十八度線を越えて南進を開始した。ソ連製戦車二百五十八台を擁し、圧倒的な兵力で南を圧した朝鮮人民軍は電撃的にソウルを占領し、韓国軍は敗走した。

米国は、韓国が北朝鮮軍の攻撃を受けると直ちに韓国支援の熊勢をとり、国連安全保障理事会で北朝鮮を侵略者と認定した決議を通した。二十七日には海軍の行動を決めた上で、再度安保理事会で軍事行動を公認する決議を通す。地上軍派遣の決定は三十日に下され、日本から米第八軍が出動していった。

七月八日、マッカーサー書簡に基づいて吉田内閣は八月十日警察予備隊を発足させた。米国は日本の基地から大軍を朝鮮に送ったため、その後を埋めるため、日本政府に七万五千人の警察予備隊の創設を指令したのである。これがその後の日本の進路に重大な意味を持つようになるのである。

八月には北朝鮮軍が、韓国軍と米第八軍を洛東江の南の釜山地区に追い詰めた。朝鮮戦争の勃発は、米国のアジア戦略における日本の地位を高める結果になった。

米韓国軍は当初は北朝鮮軍の攻勢に押し捲られ、後退をつづけた。しかし、北朝鮮軍も補給路が延びきり、最後の防衛線を抜けずにいた。そして、九月十五日マッカーサーは仁川上陸作戦を敢行し、ソウルを奪回する。北

朝鮮軍は総くずれとなった。十月三日、米韓軍は三十八度線を越えて北進した。

平壤は陥落し、北朝鮮の広い地域が解放され、米韓軍は鴨緑江に近づいていた。このとき中共軍が彭徳懐に率いられて人民義勇軍として参戦したのである。中共軍は米韓軍に壊滅的な打撃を与えた。米韓軍は敗走し、三十八度線の南に退却した。二十六年一月四日、中朝軍はソウルを再び占領した。

朝鮮での共産主義者の攻勢に対抗するアメリカの総司令部は共産党を抑え込んで、その実力闘争を封じる軍事力を日本政府に持たせることが必要と考えた。また、後方補給基地としてその重要性が認識された。

最初の出動で米第八軍はみな朝鮮に出払い、日本各地の米軍キャンプはしばらくの間空っぽになっていた。

朝鮮戦争の勃発は、米国のアジア戦略における日本の地位を高める結果になった。

(二)オクラホマ州兵の駐留

昭和二十六年二月二十六日付の北海道新聞は

米陸軍は二十四日、日本の安全保障を強化するためカルフォルニア四十、オクラホマ四十五の両歩兵師団を三月下旬日本に送り、今後の訓練のため日本に駐留させる最初の州兵師団で、朝鮮に出動した占領軍と交替するものとみられるが、必要とあれば朝鮮に送られるかもしれない

と伝えている。

米オクラホマ州兵第四十五師団先発部隊を乗せた輸送船ジェネラル・

ゲーファイ号が三月二十八日、米ミシシッピ州メキシコ湾のニューオリ

ンズを出港した。小樽に到着したのは四月二十五日のことであった(高橋一九八二)。

「雷鳥」のマークを腕につけた第四十五歩兵師団の主力、人員ははっきりしないが一万二千人から二万人が千歳に進駐したと言われる(註一六)。

この部隊は、オクラホマ出身の未訓練兵部隊で、大量進駐で基地内の施設が追いつかず、ママチ川の上流に幕舎(二十人程入れる大型テント)を設営し、当初一か月にわたり野戦訓練がなされた。オクラホマ州兵の新兵訓練は州内で十五週、北海道で三十二週におよんだといわれる。

厳しい訓練と殺伐とした幕舎生活、前途に待ち構えている朝鮮戦争、一か月ぐらいたって「外出許可」が出ると、旧室蘭街道(現国道三十六号線)や根志越南街道、用水通りに文字通りGIがあふれた(写真一)。

中堅サラリーマンの給与が六〜七千円の時代に、これといった必需品を持たずにやってきたこともあり、

バケツ、ホウキなどが千円単位で売れた。



写真一 用水路通のにぎわい(『基地の子』光文社より)

「東京横浜方面からの商品を飾ったいわいるスーベニア・ショップが、兵営近くから繁華街まで続き、今までの商店も必ず店の一部そうした土産品を置きはじめた。一日に二〜三十万円の売上げのあった洋品店もあった。昔からの老舗も次から次と二階建の、すばらしいものに改築されて、すっかり見違えるようになった(註・七)。

昭和二十一年の千歳の人口は一万千七百七十四名に過ぎなかったが、二十五年には二万二千二百二十人と急増する。

パンパンと呼ばれる売春婦が全国から集まった。町はみるみるふくれ上がり、キャバレー、ビヤホール、飲食店がつきつぎに造られ、それらの二階にはパンパンハウスという仕組みだった。いたるところに横文字の看板がならび、下卑たレコードの音楽が町中に鳴り響いている中を兵隊がパンパンと抱き合っていた(山下一九五二)。

旧室蘭街道沿いにわずかにあった集落が瞬く間に幸町、清水町、東雲町、朝日町へと広がっていった。

この年、農地を宅地に変更する申請が相次ぎ、新築許可申請は六月五十七件、七月百九十九件、八月は百十件を数えている。

キャンプ・チトセの日本人要員も二十六年三月は八百名、八か月後にはそれまでの三倍ちかい二千三百人に、さらに翌年には三千八百八十三名と加速度的に増えている。職種も人事、通訳のような事務職からボイラーマン、運転手などの技能職、そして米人宿舎のメイドなど五十種類におよんでいる。

昭和二十四年の連合軍労務者給与表によれば、通訳の平均給与が一万一千七百十一円、運転手の平均給与一万二千五百五十三円、ボイラーマンの平均給与一万二千四百六十七円と当時の一般勤労者の平均給与を上回っていた。

基地内では兵舎の建設が急がれ土建業者数社が入り、五千人の労務者が

これらの工事に携わっていた。日本人向けの呑屋の屋台が用水通り沿いに建てられた(註・八)。米兵目当ての夜の女や一獲千金をねらう業者が続々と入り込んできた。

朝鮮戦線へ投入されるといふ不安と恐怖がG I達を、酒と女の待つ夜の町に走らせた。輪タクが走り回る。パンパンが群がって散る。

ビヤホールが十一軒から五十八軒に増え、ウィークデーにはトラック二台、週末には四台分のビールが運ばれた。「サッポロビール」の道内販売量の半分のビールがG Iたちの胃袋に流し込まれた。

銭湯で入浴を断られたパンパン達が千歳川で水浴する、事件は起きるでメチャクチャだった。その当時の模様を『千歳・開基百年記念誌』は次のように記載している(註・九)。

米オクラホマ州兵師団一万二千人が朝鮮戦争の後方部隊として駐屯、そしてその消費力をあてこんだ大勢の商人が千歳に入り込み、町は思いもよらぬ様相と化します。日に三〜五戸の割合で新しくできる建物のほとんどが、キャバレー、ビヤホール、そしてバラックの飲食店などで、いたるところに横文字が並び、騒がしくレコードの音楽が街中鳴り響く中を酔った米兵が群れをなして享楽を求めさまようありさまは、さながら『西部劇の町』を思わせるような状態でした。

六月十四日、リッジウェイ最高司令官は夫人ならびに総司令部高官多数を引連れ空路北海道を訪問、第四十五歩兵師団の野外訓練を視察のうえ東京に帰還した。

「州兵の風紀問題と性病対策が憂慮問題として関係者のあいだで論議され」た(神崎一九五二)。その結果、GHQを通じて外務省に勧告をあたえると同時に、北海道終戦連絡事務所に対して嚴重な申入れがおこなわれた。

昭和二十七年一月に雑誌『改造』の特派員として千歳にきた評論家の神

埼玉は「カチューシャのいる町」北のチトセ」というルポを、七月号の『改造』に発表している。

一、風紀取締の徹底化

二、性病の予防措置

三、性病者の治療

外務省がどんな処置をとったかは、知られていない。北海道の関係機関が、あつまって相談をはじめた。チトセの町役場では、サッポロの条件（マツ）をそっくりそのまま持つてきて、六月二十一日、「風紀取締条令」を大急ぎでつくりあげた。

第一条 この条例は、道路その他の場所における売春のための客引行為等を取締ることによつて、善良の風紀を維持し、社会秩序の健全な発達をはかることを目的とする。

いわゆる客引条例である。道路上でのあらゆる客引行為が禁じられているだけで、売春行為そのものは、なんらの抑制をうけていない。

(中略)

チトセ・キャンプでは、七月十四日、「チトセ町一帯を立入禁止区域にする」ことを考慮中である」と最後通牒的な警告を發した。

(中略)

七月二十日、北海道知事室で、関係機関があつまって性病対策を協議した。

(中略)

ハウス業者をあつめて、八月三日、急造的に結成された「チトセ町睦会」は、キャンプ当局と町警察の熱心な示唆にのどづくものであった。町警察が、ハウス業者にあたえた「性病予防・風紀の維持・防犯対策上の要請事項書」には、次の事柄がうたわれている。

一、検診の励行

二、居室等の保健衛生

三、米兵の遊興時間を午後一時までに厳守
四、飲食物、ウイスキー提供の禁止

これにたいして、MPもまた、違反の事実を発見すると、オン・リミットをとりつけてオ・リミットの処分をすることになっていた。

一、衛生的な居室・台所

二、検診カードを持たない接客婦の存在

三、軍物資の取引

四、午後十時四十五分以後の飲食提供

こうした対策をおしてうかがわれるのは、在日アメリカ軍当局が、「もし性病にかからないように要心（マツ）をし、そして門限をさえおくれなければ、パンパンとあそんでいてもかまわぬ」という態度をとっているらしいことである。

第二は、取締の便宜上とはいいいながら、ハウス業者の組合を利用していることで、彼らの組織的売春・集团的売春をみとめるのと同じ結果をうんでいる。いわゆる協力関係における売春営業は、一種の公娼性をおびてくるのではないか。

この性病中心主義と、集団売春の容認は、ひとり北のチトセばかりでなく、アメリカ軍隊の存在するあらゆる軍事基地の風紀対策の共通的特徴となっている。

千歳の保健所の四月から七月までの検診では検診数四千九百八十二名に対し、罹患患者数は千百三十一名、比率は二二・七割であった。全国的な平均の数字とされる。検診の結果、性病罹患者が次第に減っていった。検診所の検診に合格しなかった女性は、治療中検診カードを取り上げられる。検診所へ通つて定期的に検診を受けているというだけの一枚の紙片が実際のには売春婦の登録カード、売春婦の免許証といったような性質のものに変わってくるのである（神崎一九五二）。

パンパンハウスは、市街地全域に二百五十軒あり、このうち睦会の表札を出しているのは百八十軒であった。ハウスは、表向きは貸間業という形式になっていた。警察には、一万二千円程度の下宿料、部屋代と食事代しかもらわぬ、女の売春行為に関係ないという形にしておかなければ勅令九号の「婦女子に姦淫を強いてはならない」にひっかかるからだ。実際には部屋貸と歩合制があり、部屋貸では女の収入からショートタイム百五十円オールナイト五百円をその都度女の収入から引き、また、食事代として百五十円取り立っている。歩合制では、四分六、または切半であった。これは完全な娼家経営であった。

神埼清は彼らを

完全なサクシユ者という印象であった。こうした非合法のサクシユ者が、組合をこしらえて、女を管理し、そのまた組合が、警察と役場につながり、キャンプ当局者にまでつながって、アメリカの兵隊のために日本の若い娘の肉体を提供させる組織的な社会体系のようなものができあがっているところに、かつまたアメリカ本国の当局が、これを否認しないかのごとく見えるところに、基地風紀問題の反人道的な重大性があるといいたいのである(註・十)

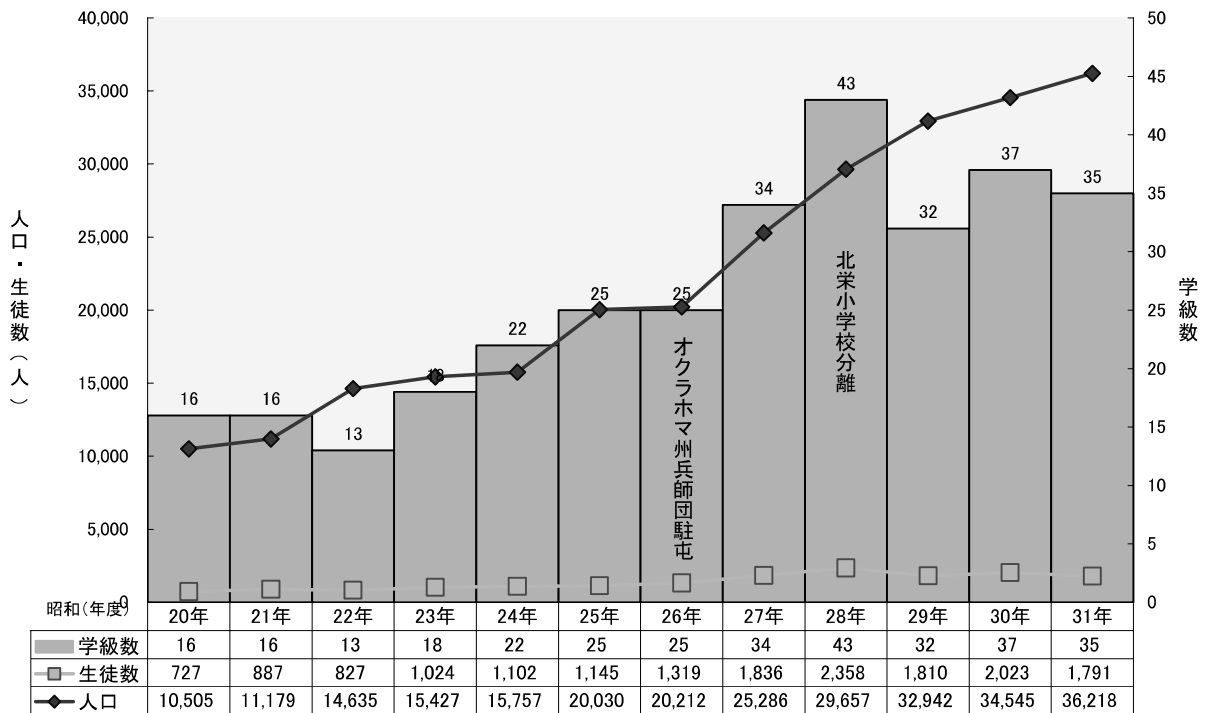
と指摘する。

こうして得られたものがビールの泡や女の口紅を通して千歳の街に落ちていた。

オクラホマ州兵は、昭和二十六年十二月、逐次朝鮮戦線に出勤する。

(二)人口増と荒廃した教育現場

人口は昭和二十五年を境に増え始め、二十七年には五千七十四名、二十八年には四千三百七十一名と急増する(表・一)。特徴的なのは女性の占



表一 千歳の人口と千歳小学校の生徒数・学級数の推移

める割合が高いことである。二十六年には千七百二十五名、二十七年には二千六百六名を数える。これらの中に米兵を目当てにした女性が多く含まれていたことは言うまでもない。

人口増の影響をもろに受けたのが学校現場であった。千歳小学校の児童数は昭和二十六年には千三百十九名だったのが、二十八年には二千三百五十八名とわずかの間に千三十九名が転入している。学級数も二十五学級から三十四学級と九学級も増える。

増えつづける児童に、机、教科書、そして教室が不足した。二部授業で急場を凌いだるが、翌年には分離・新設を余儀なくされている。

もう一つは米兵目当てに全国から集まった女性と性風俗教育問題であった。千歳小学校の教諭千葉誠が調査し、昭和二十七年、第二回日教組全国教育研究大会で「軍都・快楽の街・北海道・千歳基地」を発表し、学校教育の問題で全国にその名を売った(註一十二)。

この報告で六年生の女の子の綴り方が紹介されている。

千歳の街

六年(女) Y・N

千歳の街は、ピヤホールが多いので私たちが勉強する気になっても、うるさくてできません。ピヤホールを少なくしてほしいです。それから川でせんたくしたり(註)パンパンが随分洗濯している川にごみをなげたりすることはやめてほしい。千歳の街にへんな女の人が、たくさんいて、がやがやさわいで歩いて、うるさいからいなくなればいいと思います。きよねんはこんなことはなかったのにことしにかけてふえて私はどこかにうつつていききたいと思います

現実をナイーブな感性訴えている。

子供たちの作文を分類してみると「パンパンがいやだ」などの理由で千

歳を「好ましくない街」と書いた子は約五十五割もいたが、「よい街」と答えた子は約三割にすぎなかった。

特殊女性に間貸ししていた家庭は約一割もあり問題の根深さを物語っている(註一十二)。

(四)帰還兵・第一騎兵師団

昭和二十六年の十二月末から一月に、馬のマークの第一騎兵師団が朝鮮戦線から帰り、後を引き継ぐ。

第一騎兵師団は、太平洋戦線ではレイテ・北ルソン(フィリピン)を転戦し、終戦後東京に進駐していた。

昭和二十五年八月、第二騎兵師団は、千四百五十名の補充を受けて総員一万二十七名(充足率六十割)となり、十二、十四日横浜で乗船、十五日出港、二十二日朝鮮半島南部の迎日湾(慶州浦項市)に上陸した。

北朝鮮軍は、韓国軍と米第八軍を洛東江の南の釜山地区に追い詰めた。第一騎兵師団が迎日湾に上陸したときの総員は、約一万人であったが、二十三日から三十一日にわたる十日間の遅滞戦闘で戦死七十八名、負傷四百十九名、行方不明四百十九名、計九百十六名(約九割)の損害を受けた。

その作戦要領は、第二十四師団の兵力の逐次加入の方式とまったく異なり、その全力をもって永同(中清北道)と金泉(金泉市)の二か所で防御したものである。

第一騎兵師団が敵に与えた損害は約二万名で、主として砲・迫撃によるものである。しかし、第一騎兵師団が小白山脈で敵を食い止めてくれるかもしれないというウオーカー將軍の期待は満たされなかった。第一騎兵師団は、北朝鮮第三師団の攻撃を阻止できなかったのである。

手痛い損害を受けた第一騎兵師団は、昭和二十六年十二月、朝鮮戦線から千歳の第二基地に帰還する。

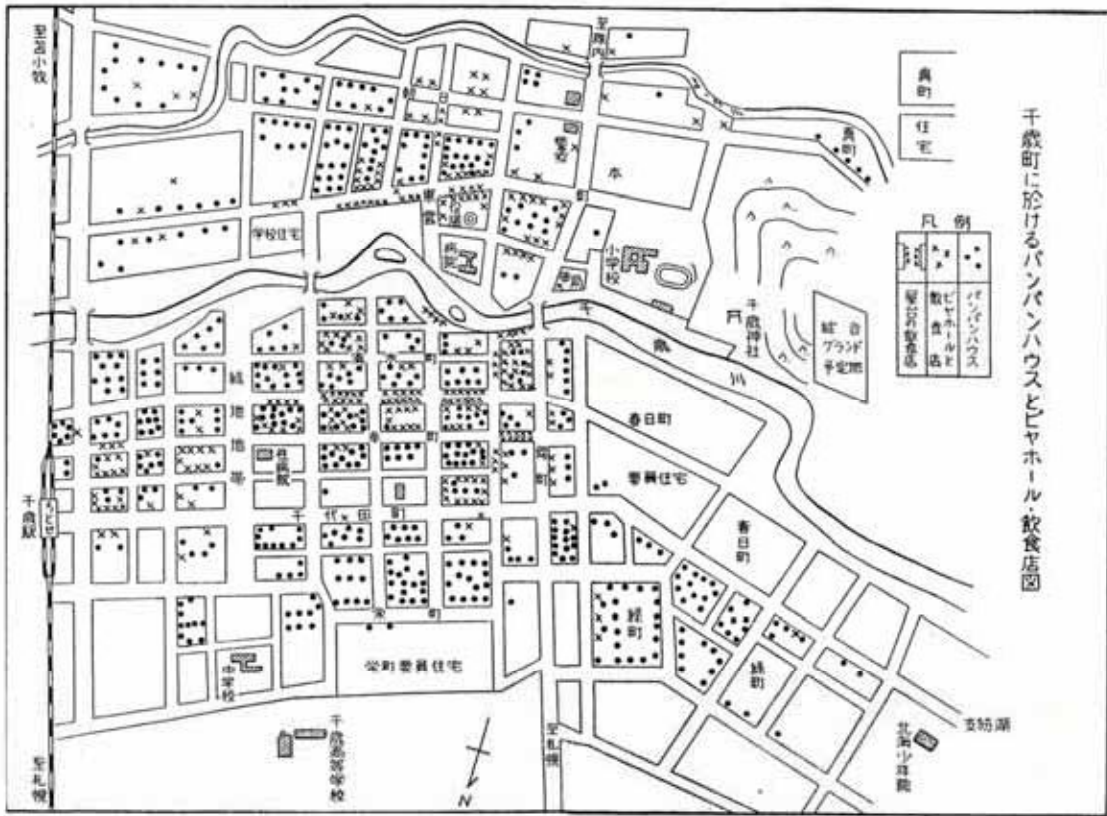


図-1 パンパンハウスとピアホール・飲食店分布

朝鮮帰りのGIは気が荒くなっており、オンリーの争奪戦も血で血を洗うやりとりであった。

オンリーを含め夜の女は二千人を超えた。オンリーは、いわゆるオンリーワンで純粋の洋妾ないしはガールフレンドで、米兵と結婚できると信じている者、実際に手続中の者も少なくなかった。彼女達は米国文化に心酔し、米兵との安易な愛情生活に陶醉していた。しかし、オンリーの中にも安易にバタフライ(浮気)しているものも少なくなかった。

- 先述の千葉誠が二十七年八月十九日に調査した結果によれば、純然たるハウス四百二十三軒、パンパンに間貸七十七軒、店の二階をパンパンに三十九軒を数えている。欄外には「1.チトセ街全体がパンパンの巣である。2.街はずれ方(緑町)はオンリーが多い。3.中心街は階下が普通の店で、二階を大きくとってパンパンに間貸している。4.二坪位のブラック作りの屋台が多く労働者とパンパンが利用している。設備は不衛生である。5.アメリカ専門の土産店が、本通りと繁華街に多い」とある(註・十三、図・一)。

特殊女性の増加とともに、性病は米軍基地内に広がっていった。

幸町四丁目にあった北海道立幸病院(図・一、緑地帯そば)の性病院によると昭和二十七年四月から三月までの一年間に検診した女性は千八百九十四人、このうち二百十五人が梅毒に、千二百一人が淋病に、四百七十八人が軟性下疳(げかん)に罹患していた。

昭和二十八年五月二十六日、第一騎兵師団クラーランド少将は山崎町長ら町幹部と面談し、徹底取締りを申し入れる。町も本格的な対策に乗り出す。この辺の事情については幸病院発行の『千歳町における売春婦の実態』に詳しい(註・十四)。

昭和二十八年五月千歳町では、「特殊貸間業認証に関する特別措置条例」案を

発表し、これによって風紀の浄化、性病の撲滅を図ろうとしたが、札幌地検、道庁、国警側から公娼制度復活の危険ありとして反対を受け、同年六月「風俗営業取締法施行条例」を改正の案も出たが、国警の反対でこれも立消えとなり、結局「千歳町風紀取締条例」の一部を改正し併せて自肅協力機関を設けることで落ち着いた。しかしその後も内外の世論と批判の目は厳しく、自肅協力機関たる自肅振興会は、オンリー、女給等を含めて「自発的全面検診」を実施するに至った。更に同年十二月十八日外務省国際文化風紀委員の「米軍に対し千歳町を立入禁止地域として要請する」と決議した旨がもたらされ、一方、国警札幌方面隊の「ハウス業者の存在は許さない」の取締方針も目を追って峻烈となり、同年十二月十二日には、ローズクラブ（ハウス業者の組）は解散と決定（解散時百四十軒四百五十人）昭和二十六年六月睦会として発足以来三十ヶ月にして、その幕を閉じるに至った。

その後、業者の転廃業が進み、昭和二十九年二月一日では下宿業四、飲食店四、旅館五、カフェー二十五、料理店五、オンリーハウス十三、質屋二、古物商二、無職二十一、引揚（九州へ）十二となっている。

第一騎兵師団が二十九年十月、内地に移駐するとパンパンたちは潮を引くように散っていった。

(五)朝鮮戦争の終結と日本の復興

米国内では、国務省は占領を長引かせず、早期講和の促進を図ろうとしたのに対し、軍部は日本での軍事基地の継続利用と日本の再軍備とを望んで講和尚早論を説いていた。

トルーマン大統領は共和党のJ・F・ダレスを対日講和問題の顧問に任命し、調整に当たさせた。調整がついたのは昭和二十五年に入ってからである。軍部は講和後の基地利用と再軍備を日本に受け入れさせることを前

提に早期講和を認めたのである。

米国は中国革命や朝鮮戦争を機に、対日政策を転換させ、共産主義を追究して再軍備を指令した。しかし、吉田茂は再軍備に抵抗し、日米安保条約を提案し、軽軍備と経済復興最優先の路線を打ち出したのである（天川一九八八）。

東欧に対するソ連の支配、朝鮮戦争及びソ連による原水爆の開発は米国人の間に恐怖を植え付けた。

昭和二十六年三月十四日、米韓軍ソウル奪還。四、六月、米韓軍三十八度線を突破。戦線は膠着状態に。マッカーサーは鴨緑江以北の爆撃を主張し、戦争の拡大と原爆の使用に勝利の可能性を見ていたマッカーサーは、四月十一日、トルーマン大統領に解任される。

これがシグナルとなって平和の機運が高まり、昭和二十八年七月二十七日、休戦協定が調印された。

戦争によりおびただしい死者が出た。韓国軍の死者は三十万人。米軍は十四万人、国連軍は一万四千人と発表されているが、北朝鮮軍と中国人民義勇軍の死者は二百万人と推計される。

十月、アメリカ政府は「対日講和の骨子を「対日講和七原則」として公表した。米軍特需と輸出が伸び、その後の昭和三十年代からの高度経済成長の基礎をつくった。

(六)基地経済

日本側の米軍の調達に対する受入業務は、昭和二十年九月五日に外務省の外局として終戦連絡中央事務局が発足し、九月六日には京都と横浜に地方事務局が置かれ、のちに十七か所に増やされた。

昭和二十年九月三日、GHQから指令第二号が出され、米軍の直接使用のために供給する所要資金及びその要求する物資、サービス、労務などの

調達に必要な経費はすべて日本側が負担することになった。したがって昭和二十一年度以降は、終戦処理費として財政支出となり、講和発効の前年の昭和二十六年六月三十日まで、日本政府が負担することになるのである。昭和二十年十月五日、米第五航空軍約二百名が千歳基地に進駐すると、町に対して労務提供を要求した。町は町内から約百名から二百名の日雇い労働者を当初毎日出した。

昭和二十年十月十五日、終戦連絡北海道事務局が、町役場会議室の一部を使用して開設、労務の斡旋、賃金の支払い業務を開始した。その後労務者の増加に伴い、住宅管理業務として元海軍省所管の住宅を有家族者に、元海軍航空廠女子工員寄宿舎(清和寮)を独身者に使用させたが、住宅管理業務は翌二十一年四月十五日、札幌管財局千歳出張所に移管された(長見一九七九)。昭和二十二年九月一日には公法人特別調達庁が発足、調達業務は特別調達庁に集中されていった。各地方では、都道府県が涉外関係の係を設け、知事が最高責任者になった。

当初は地方事務所長、市町村長、警察署長、勤労動員署長などが中心になって占領軍受入れの各種機関が設けられた。町の職員は五十名程度、町の業務は労務提供、両替など多岐にわたった。

進駐軍要員の雇用は町への経済効果は大きなものであった。反面、米軍の部隊の都合で採用、解雇が繰り返し返され不安定なものであった。オクラホマ州兵師団が駐屯していた頃、要員の雇用は二千三百人にも達していたという。

「米占領軍は日本軍が中国で行ったような現地徴発は行われなかった。(中略)日本政府から占領軍にたいして終戦処理費という名目で、毎年、日本銀行券の形で占領軍の現地調弁費を納めさせ、これを占領軍は使って日本の物資や労働力を動員利用した」(註一十五)。

米軍の進駐により、スーパーニア・ショップ(土産店)や商店が増える。

(単位：千円)

種 目	入 歳		
	25年	26年	27年
町税	22,256	41,052	75,173
地方財政平衡交付	14,290	15,546	26,479
公企業及び財産収	744	1,425	2,290
使用料及び手数料	556	1,857	2,969
国庫支出金	9,143	11,726	21,518
道支出金	1,821	6,921	293
寄付金	701	2,239	603
繰越金	3,905	4,466	3,313
雑収入	1,372	2,890	3,669
町債	3,000	8,200	12,800
計	557,788	96,322	149,107

表一 2 歳入の変遷

また家の新築増により大工や、輪タクを商いとする人などの転入が目立った。やがて兵隊を直接相手にするビヤ・ホール、ハウスなどが瞬く間に出現する。九州など他の地域から転入してきた人が多かった。そうした人々は地域や既存の人間関係を抜きにした「利潤の追求」を目的としていた。基地内の兵舎建設、兵隊の落とす金や進駐軍要員の雇用増など町の経済を潤すという側面も大きかった。

町の税収も二十五年に二千二百二十五万六千円が、二十六年は四千五百万二千円(百八十四割)、二十七年には七千五百七十三万三千円(百八十三割)と驚異的な伸びをみせる(表二)。

また、昭和二十五年のシャープ勧告により創設された地方財政平衡交付金は二十七年には二千六百四十七万九千円であった。人口規模の近い砂川町が三百三十六万二千円で、千歳における特殊事情に対する政策的であ

(単位：千円)

種 目	歳 出		
	25年	26年	27年
会議費	1,038	815	1,644
役場費	8,890	8,152	9,691
徴税費		2,171	3,159
監査委員費		78	99
警察消防費	4,915	8,629	12,582
土木費	10,784	11,191	17,250
教育費	10,167	30,274	61,719
社会及び労働施設費	9,693	21,368	18,043
保健衛生費	1,286	804	1,557
産業経済費	1,649	4,555	6,813
財産費	819	1,367	1,340
統計調査費	316	362	433
選挙費	548	660	961
公債費	1,034	1,466	2,864
諸支出費	2,184	2,111	3,873
予備費	△199	△210	0
計	53,323	93,009	141,028

表-3 歳出の変遷

ろう財政補助の大きさがわかる。

一方、急激な人口の増加に伴う教育、労務者集合施設、住宅などの諸施設費や治安維持のための警察吏員定数を十四名から二十五名への増員するなど、進駐軍諸費の増加をみている。

特に教育費の伸びが著しく二十五年の一千六万七千円に対し、二十六年には三千二十七万四千円(二百九十七%)となっている(図-1)。

町長山崎友吉は、昭和二十五年十二月十五日、札幌特別調達局長宛に「連合軍接収予定地の各種補償申請について」の文書を提出している。

これには、米軍の演習地などで接収される地域に住む農家(シユクバイ、アウサリ)や薪炭業者(ママチ)など四十六人の「除却」される家屋建築費、動産移転料、作付、炭釜など多岐にわたる補償費を積算した調査が添付されている。

昭和二十六年四月のオクラホマ州兵の駐屯に先立って幕舎の設営地や予定されていた三十二週の訓練のための演習地が早急に必要とされたためである。

職員が五十名程の町役場に米軍の駐留に伴い補償調査や移転交渉など過大な事務が課せられる。その後も接収の賃貸契約や進駐軍要員の手配など駐留軍関係の事務が増え続ける。

昭和二十八年十月十一日、千歳飛行場と陸軍師団本部のあった真駒内の在日米軍キャンプ・クロフォードと連絡、物資運送を目的として造られた弾丸道路が完成した。

建設費八億七千二百万円は、進駐に必要な施設建設に使われた道路特別事業の「安全保障費」か

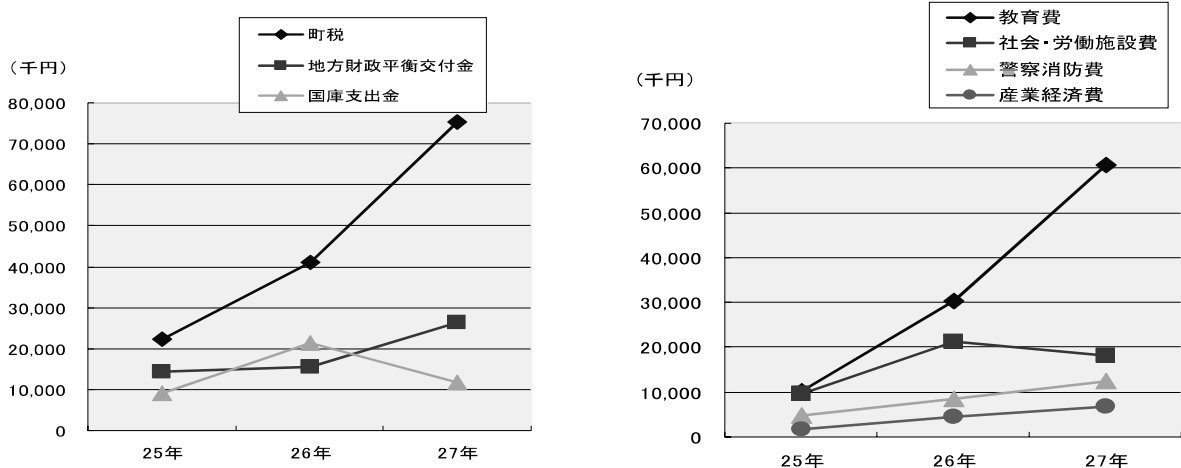


図-2 歳入歳出の変化

年度	月	進駐軍要員	摘 要
20年	5月	200名	第5航空軍の進駐により労務提供を要求
21年		200名	
22年	8月	1,300名	労働組合の賃上げ要求頻発
23年	3月 12月	950名 750名	三沢基地への移動により2割転属、整理解雇 約15名の減員
24年	6月 12月	460名 615名	部隊交代常備労務者約250名、日雇労務者150名解雇 逐次増員
25年		615名	
26年	3月 4月 11月	800名 2,300名	オクラホマ州兵師団駐屯 第2基地新設
27年	3月	2,883名	
28年		*	施設の新設と共に大幅に増員された要員も基地の完成により労務提供は削減され、部隊の移動により逐次減員
29年	9月	*	陸軍の撤退により1,828名大整理 陸軍の駐留により33年3月までに1,626名再任用

表-4 進駐軍要員の変遷

(*実数不明)

ら持ち出されている。国道三十六号線は、その後日本側に多くの利便を与えたなど駐留軍が千歳にもたらしたのも少なくなかった。

神崎清の試算によると、州兵師団を一万五千人、「月給を平均百ドルとおさえて、その三分の一を遊興飲食に使えものとすれば」一か月四十九万五千ドルが千歳の町におちることになる(神崎一九五二)。一ドル三百六十円に換算すると一億七千八百二十万円である。

当時警察官の初任給は四千五百円であるが、現在の警察官の初任給は、高卒で十六万五千二百三十四円、約三十五・六倍である。現在の金額に勘案すると六十三億四千三百九十二万円になる。これに米軍進駐要員の給与などを考えると米軍による実態経済は極めて大きいことになる。

しかし、それらは米軍経済に依存したいびつな産業構造(基地依存経済)であり、米軍の動向に大きく左右され「結果的に」経済的自立の基礎づくりが遅れたことは否めない。

米軍の駐留の規模が縮小すれば基地経済が短期間で消滅するのやむを得ないことであった。

三. サンフランシスコ講和条約の締結

昭和二十六年九月八日、サンフランシスコで講和条約が調印された。講和条約には、極東軍事裁判その他の連合国の戦犯裁判を日本が受諾する旨の条文があるが、日本が主催国として国連憲章五十一条の個別的又は集団的自衛権をもつことと、日本が集団的安全保障の取り決めを自発的に締結することを許すなど、敗戦国に苛酷な条件と制限を課すものでなかった。

九月、こうした日本民主化措置は、その競争力の除去を主眼としており、対日賠償請求の軽減ももっぱらアメリカの対ソ戦略の面からとられた措置であった。二十五年に勃発した朝鮮戦争に促されて米国主導のもと、翌二十六年、ソ連、中国を除外した形でサンフランシスコで講和条約が締結

された。

講和条約は、

(一) 領土

① 朝鮮の独立の承認

② 台湾と澎湖諸島に対するすべての権利の放棄

③ 千島列島とポーツマス条約で得た樺太の 一部のすべての権利の放棄

④ 琉球諸島、小笠原諸島のアメリカ合衆国を唯一の施政権者とする国連の信託統治下に置く

(二) 賠償

日本が戦争中に与えた損害や苦痛に対して支払う

(三) 国内措置

極東軍事裁判戦犯裁判の承諾、個別的、集団的自衛権の保有

とするものであった(天川一九八八)。

昭和二十八年七月、板門店で休戦協定が結ばれ、四百万人以上の犠牲者を出した朝鮮戦争は終わった。

「朝鮮戦争によって東西冷戦の軍事化と世界化は決定付けられた。(中略)ヨーロッパからアジアにまたがる反共軍事包囲網が形成され、世界は東西両陣営に色分けされた。朝鮮戦争は朝鮮の分断を固定化し、台湾の軍事的解放を不可能にし、その後二十年に及ぶ米中対決の原型を形成したのである(岩田二〇〇〇)。

戦争放棄の規定は、政府の解釈で「自衛の保持は可能」とされ再軍備の道を歩みだした。日本の経済は、朝鮮戦争の特需景気によって疲弊から回復した。

四. まとめ

米軍の進駐が、要員の採用、解雇など行政、社会に及ぼした影響は大きいものであった。

米軍による占領政策は、戦勝側による「文明の裁き」や「勝者の裁き」はともあれ共同謀議理論の適用など無理があることも多々あった。

マッカーサーが父アーサーがフィリピン軍事総督として試み果たせなかった社会改革の実現や米共和党大統領候補を意識したこともあり、歴史的に見れば、連合軍による占領はよりましな占領であった。

しかし、それは占領軍と被占領側の関係においてである。米軍側の事情、利害によって占領政策は左右された。

日本経済の自立化の要請は、米ソ冷戦の激化、何よりも中国本土が急激に共産党の支配下に入ろうとする勢いは日本を強化してアジア安定の基地にするという政策転換を生んでいった(袖井一九八八)。

昭和二十五年の朝鮮戦争の勃発は日本のその後を変えていった。日本にいた米第八軍はみな朝鮮に出動した。日本の米軍キャンプは空っぽになり、やがて米軍本土から増援軍が到着し、日本で体勢を整えて朝鮮に出動していった。その入れ替わりに負傷者など朝鮮戦線から後送された。彼らは皆日本を通過していった。キャンプ周辺に集まる。パンパンと呼ばれる売春婦が急増した。

繁華な通りは、背の高い米兵が道路一ぱいに溢れて活歩し、得意顔に口紅を濃くした足の短いパンパンが、ぶら下がるようにして手を組み、街の辻々には獲物を狙う彼女たちがズラリと並ぶ。街には破れかえるようなアメリカジャズの騒音。独立国日本人がその間をオドオドしながら歩いている(註・十六)

町は狂乱と化した。

部隊名	昭和	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
陸軍第2空挺師団			4月	7000人							
第7歩兵師団						2月	7000人				
第45歩兵師団 (オクラホマ州兵)								4月～ 12月			
第1騎兵師団								朝鮮から 12月	7000人 10月		

図-3 千歳に進駐した主要部隊と人員

倒産、失業にあえいでいた日本経済は米軍特需と輸出の伸びにより昭和三十年代から高度経済成長の礎をつくった。そして朝鮮戦争は日本とアメリカとが永続的な独特な同盟関係を結ぶ条件となった（和田一九八八）。

米国は中国建国や朝鮮戦争を機に、対日政策を転換させ、共産主義を追放して再軍備を指令した。そして日本との講和を急ぎ、朝鮮戦争中の二十六年、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約を結び、日本を米国の陣営につなぎとめた。

千歳には、昭和二十一年の第十一空挺師団から二十九年の第一騎兵師団まで七千人から一万五千人の米軍将兵が駐留した（図-三）。その多くが二十代前半の若い兵であった。千歳は、軍とともに有為転変した。国と国

昭和19年陸地測量部撮影の写真を複製したものである



写真-3 戦前の千歳（昭和19年）（財）日本地図センター提供

の狭間にあつてその現実を撥ね付けるのは難しかった。

千歳は、戦後日本で最も大きく変化した町のひとつである。軍国主義下の社会の生活規範、価値観、道徳観が崩れ、占領という体験によつてたらされた米軍文化を実感した。それは他の地域とは比較にならないほど可及的で影響が大きかった。新しい社会の仕組みやモラルはまだ確立されていなかった。



写真-4 戦後の千歳

千歳の町民は、占領、米国人、米国社会など「戦後」という時代に遭遇し、適合していった。人々は彼らのもたらす金を目当てにスーパー・ショップやビヤホールなどの商売を始めた。市街地は急速に拡大していった。

基地千歳における売春を、一言でいえば「基地売春」というべきものである。大量且急激な外国部隊(米軍)の駐留により生じ、彼ら外国人を相手としたむき

だしのままの売春行為である。

それは、旧公娼時代の伝統をもつたものから、オンリーという形態に至るまで、まことに多種多彩である(註一七)。

九州などから多くの人間が入り込んだ。米兵を相手にするパンパンがあふれた。朝鮮戦線への出兵を目前にしたオクラホマ州兵、修羅場を潜り抜けてきた第一騎兵師団兵、彼らは緊張感と刹那、あるいは安堵感に包まれ千歳を舞台に、一ドル三百六十円の経済力を背景に欲望をあらわにした。

それを取り巻く人々には「利潤追求」を優先する拝金主義がはびこった。国と国の狭間で起きたこうした現実をこの町の人が否定することも排除することも難しかった。

公娼制度を承認し、特殊貸間業の認証に関する特別措置条例の対応にみられる、現状を容認し、小手先の改善に終始したのはそうした背景がある。

しかし、彼女達により実際には大きな恩恵を受けた人間が多い(山下一九五二)のも、またそれらが市街地の急速な拡大や経済基盤の確立などそれ以降の町づくりの基礎をなしたのも事実である(図一三・四)。

米軍の進駐と基地経済は特殊な歴史のもと、特殊な状況下でつくりだされたものであった。夢幻はうたかたのように消えていくのは歴史の必然だった。

米軍の撤退、自衛隊の誘致、空港ターミナルビルの建設、工業誘致など人口増に係わる数多くの「変数」により千歳が蘇るのは昭和三十年代から四十年代になってからである。こうした変遷は千歳の歴史的風土となった。これらの風に晒されたエネルギーの持続がこの町を発展させる動因をなした。

本稿を作成にあたり文献、米軍について守屋憲治氏に「便宜、ご教示をいただいた。謝意を表するものである。」

註・文献

註

註・一 平成七(1995)年『最新資料をもとに徹底検証する 昭和二十年
／1945年』p. 二百二十六 小学館

註・二 註・一に同じ。p. 二百二十八

註・三 守屋憲治 昭和六十(1985)年 『北の翼―千歳航空史―』

p. 二百七十七～二百十九 みやま書房

註・四 北海道新聞社 昭和五十四(一九七九年)六月二十五日 「進駐軍」

『ちとせ百年 四十四(昭和・戦後)』

註・五 神崎 清 昭和二十七(一九五二年) 「踏査報告 独立の断層・北のチ
トセ」 p. 百五十三『改造』 七月号

註・六 『千歳市史』では一万二千人(p. 三百三十八)と一万五千人(p. 五
百三十五)、『増補千歳市史』では一万二千人、『新北海道史』では二万人と
バラツキがみられる。本稿では、当時千歳に居住し実地調査した千葉誠の一
万五千人をとった。

註・七 千葉 誠 昭和二十八(一九五三年)

『軍都・歓楽の街・北海道千歳基地』 p. 十二 『基地日本』和光社

註・八 註・七に同じ

註・九 千歳市 昭和五十四(一九七九年)『千歳・開基百年記念誌』

p. 二十二～二十三

註・十 註・五に同じ。p. 百六十一

註・十一 註・七に同じ

註・十二 北海道新聞社 昭和五十四(一九七九年)七月七日 「特殊飲食店」

『ちとせ百年 五十一(昭和・戦後)』

註・十三 註・七に同じ。

註・十四 北海道立幸病院 昭和二十八(一九五三年) 『千歳市における売春婦
の實態』 p. 五十六

註・十五 木村幸八郎 昭和二十八(一九五三年)五月 「基地経済の問題点」

p. 二百四十五～二百五十六 『基地日本』 和光社

註・十六 註・七に同じ。p. 十二

註・十七 註・十四に同じ。p. 五十五

引用文献

神崎 清 昭和二十七(一九五二年) 「踏査報告 独立の断層・北のチトセ」

『改造』 七月号

千葉 誠 昭和二十八(一九五三年) 「軍都・歓楽の街・北海道千歳基地」

『基地日本』和光社

北海道立幸病院 昭和二十八(一九五三年) 『千歳市における売春婦の實態』

猪俣浩三・木村禧八郎・清水幾太郎 昭和二十八(一九五三年) 『基地日本』

和光社

清水幾太郎・宮原誠一・上田庄三郎 昭和二十八(一九五三年)

『基地の子―この事実をどう考えたらよいか』 光文社

奥田二郎 昭和三十六(一九六一)年 『北海道米軍太平記・黒と赤の日誌』

山下愛子 昭和三十六(一九五二年) 「チトセ」 『婦人公論』 11月号

陸戦史研究普及会 昭和四十一(一九六六)年十二月

『陸戦史集一 国境会戦と遅滞行動(朝鮮戦争)』

千歳市 昭和四十四(一九六九年) 『千歳市史』

工藤和博 昭和五十一(一九七六)年 「はる(春)のないはる(青春)〜売春婦の実
態調査より〜」 『道庁文化』 第四号

態調査より〜」 『道庁文化』 第四号

態調査より〜」 『道庁文化』 第四号

態調査より〜」 『道庁文化』 第四号

北海道 昭和五十二（一九七七）年 『新北海道史』第六卷通説五

千歳小学校開校百年記念誌 昭和五十三（一九七八）年 『足跡百年 未来へつづ

く』

工藤和博 昭和五十五（一九八〇）年 「はる（春）のないはる（青春） 第一部く売

春婦の実態調査より・売春と性病く』『道庁文化』会報三十四

長見義三 昭和五十四（一九七九）年 「渉外労務管理団体の沿革」『増補千歳市

史』千歳市

高橋昭夫 昭和五十七（一九八二）年 『証言北海道戦後史・田中道政とその時

代・』北海道新聞社

守屋憲治 昭和六十（一九八五）年 『北の翼―千歳航空史―』みやま書房

和田春樹 昭和六十三（一九八八）年 「朝鮮戦争―冷戦と日本の「役割」』週刊

朝日百科 日本の歴史 百二十四』朝日新聞社

北海道道路史調査会 平成十五（二〇〇三）年 『札幌・千歳間道路物語』

株式会社山三ふじや 創業二〇〇年記念社史編集委員会

平成十七（二〇〇五）年 『株式会社山三ふじや創業一〇〇年記念社史』